

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 2 月 28 日

所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生 2 年
氏名	齋藤 美保

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
チェコ・プラハ
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
Antelope, Giraffe, Hippo 2017に参加
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 2 月 18 日 ~ 平成 29 年 2 月 28 日 (10 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Derbianus conservation
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の出張ではポスター発表を行うこと、IUCNの species subgroup の会議に参加することを目的として渡航した。 この会議は Antelope, Giraffe, Hippo の野生での生息状況を把握して、それらの野生・飼育両面での保護対策を協議する IUCN のサブグループの方々が主に集う会議である。加えて各サブグループには加盟していない動物園関係者、フィールドワーカーなども多く参加していた。各研究者や保護関係者が自身の研究や、各地域における野生動物の保護プロジェクトの発表などを行う一方で、会議期間中にはサブグループのオープン会議があった。私は Hippo と Giraffe のサブグループ会議に参加した。 Hippo のサブグループ会議では、population size の調査方法が国レベルで全く異なる、各カバの生息環境における遺伝的多様性を調べるうえでのプロトコルの統一をどのように進めていくか、といった問題について話し合った。私がキリンを調査しているタンザニアのカタヴィ国立公園はカバの生息頭数がとても多い。しかし、現在IUCNに報告されているタンザニア国内におけるカバの生息頭数情報は、2001年のものだろう。16年前の情報と現在ではその推定生息頭数は大きく違うことが予想される。調査地でカバを毎日見ている私としては、何かカバの保護に役立てることはないだろうか、と考えるきっかけとなった。 Giraffe のサブグループ会議では、どのようにソーシャルメディアを活用して一般社会にキリンの野生での生息状況を発信していくか、各国ごとにどのようにキリンの保護政策を策定していくか、ブッシュミートとしてキリンが少なからずも取引されている現状をどのように調査するか、などを話し合った。今まで私はキリンに対して研究面からのアプローチしかしてこなかったが、このように国際的な場で、キリンの野生での生息環境でどのような問題が上がっていて、それに対してどのように対処していけばいいのか、保護面からキリンのことを考える貴重なきっかけとなった。
今回の会議には、アフリカの本屋ならどこでも見かけることが出来るであろう、アフリカの動物図鑑などを出されている Jonathan kingdon 教授も参加されており、個人的にお話しする機会を頂いた。Kingdon 氏の話によれば、彼は1970年代に京大の客員教授として日本に招かれたそうで、半年のうちほとんどを犬山、つまり霊長類研究所で過ごされていたようだ。彼は、日本が高度経済成長期を経て、初めて日本政府が資金を出す(それまでの日本には海外から誰かを呼べる資金がなく、逆に海外から資金をサポートしてもらって誰かが来日する、といったシステムだったようだ)、海外からの客員教授の4人のうちの1人だったそうで、私の知らない日本の姿に興味深く聞くことが出来た。また、彼はタンザニアで生まれたそうで、スワヒリ語と一緒に会話もし、一気に親近感を抱いた。このような著名な方と話をする機会があったのも非常にいい経験であった。
イングランドで PhD 研究を行っている学生、ドイツで PhD 課程に進んだが資金難で中途退学した学生の話を知っていると、彼らは自身の研究資金を集めるために、日々様々な団体の助成金に応募しているようで、そこからくるストレスは相当なものだそうだ。また、ある学生は野生での動物保護に多額の資金を出資しているアメリカの動物園とのコネクションを作るために、アメリカの動物園がメインである会議に参加していた。そのような海外学生の研究資金に関する実情を知っていると、PWS という制度は研究に集中できる、恵まれた制度である、と改めて実感した。

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図1:会議の様子

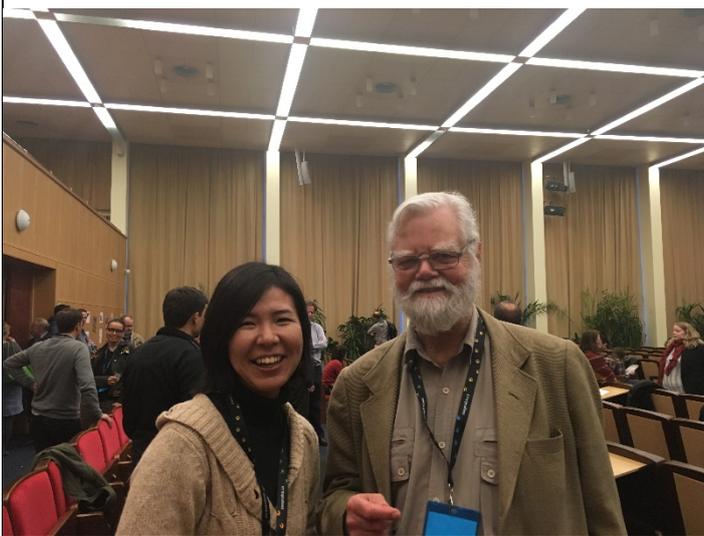


図2:Kingdon 氏との記念撮影

## 6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディングプログラムの援助を受けて行いました。プログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。